

ゴールは全ての県民が表現者になること。

アーツカウンシルしずおか ~ふじのくに・ウェイ・オブ・ライフの発掘と創造~

静岡県知事 川勝 平太 × 静岡県文化プログラム推進委員会・委員長 鈴木 壽美子氏 × アーツカウンシルしずおか・アーツカウンシル長 加藤 種男氏

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に合わせ、全国をリードする形で実施された「静岡県文化プログラム」。そして、そのレガシーとして新設された「アーツカウンシルしずおか」。それぞれの設立と運営に深く関わった、川勝平太・静岡県知事、静岡県文化プログラム推進委員会・鈴木壽美子委員長、アーツカウンシルしずおか・加藤種男アーツカウンシル長の3人が、これまでの成果と今後の取り組みについて熱く語り合った。

静岡県文化プログラムの意義と成果

知事 オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典ですが、オリンピック憲章には、オリンピックは、生き方の哲学であり、スポーツと文化の両方を融合する平和の祭典と謳われています。2012年のロンドンオリンピックの「文化プログラム」は大成功でした。私は2014年11月の全国知事会で、イギリスに倣って、北海道から南は沖縄まで、日本全体をExhibit(展示)する文化プログラムの実施を提案しました。知事会の賛同を得、その後、国の方針にもなりました。静岡県では全国に先駆けて2016年5月に静岡県文化プログラム推進委員会を立ち上げ、鈴木壽美子さんに委員長になつていただき、加藤種男さんという逸材がお手伝いをしてくださることになり、「静岡県文化プログラム」が走り出しました。厳しいコロナ禍の中

公演を指導されましたが、非常に美しく、会場が興奮と感動に包まれましたね。

鈴木氏 「地域密着プログラム」は「富士の山ビエンナーレ」や、大井川鐵道の『無人駅の芸術祭』もとてもユニークで素晴らしいと思います。また「かがわ茶エンナーレ」は地元の方々の協力で熱意がすそ、町中で応援していることが、ひしひしと伝わってきました。どこへ行っても家をオープンにして、「お茶を飲んでいってください、見ていってください」という感じで、地域とアートが共鳴することが具現化されている、と嬉しく思いました。今回は、「コロナ禍」という厳しい状況の中でしたが、経済界の方々にもお世話になりました。教育、福祉、企業など、社会のさまざまな分野とつながりができたという意味でも大変意義のあるプログラムだったと思います。

加藤氏 プログラムの数がとても多いことが素晴らしいですね。これだけ全県くまなく、そして幅広いテーマで芸術文化活動を展開している県は、他にないかもしれません。質的にも静岡県が全国に誇れるプログラムはいくつかあるのですが、そのつ

でありながら、志を曲げず、周囲を励まし、協同して「文化プログラム」を推進していただきました。特にお二人に感謝しています。ありがとうございます。

鈴木氏 静岡県文化プログラム推進委員会では、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、地域とアートが共鳴する、というテーマを掲げ、プログラムを三つのカテゴリーに分けま

した。一つは今や世界的に評価されている舞台芸術・SPACによる「全国的プログラム」。そして推進委員会と県内の文化団体が連携して開催する「県域プログラム」。さらに市町や各種団体等による「地域密着プログラム」です。これには静岡県独自の認証制度を設け、その活用を広く呼びかけました。その結果、延べ1300件以上のプログラムを認証し、県内

各地で多くの文化プログラムが展開されました。
知事 SPACの「アンティ」「ネ」は圧巻でした。ギリシャ悲劇に日本の死生観を織り込んだものですが、見事に世界に通じる普遍性を獲得しています。宮城聰さんの力量はやはりすごい。磐田市の舞踊家の佐藤典子さんが、アジアの舞踊と音楽に詩を入れ込んだ「ララバイ」という



がSPACですね。SPACは国際的な評価を受け、2017年にアヴィニヨンの演劇祭のメイン会場である法王庁中庭でオープニングを飾ることができました。その国際的な評価・水準をどのように担保しているかという点、実はSPACは、専用の劇場を持っています。つまり、劇場と劇団が一体化しています。これは世界の演劇界では普通ですが、日本では

珍しいことです。民間では、宝塚や歌舞伎のような例はありますが、公立の文化施設と劇団が一体化している例はほとんどありません。それを静岡県は早くからSPACという形で推進してきました。そこに新たに「文化プログラム」という形で、さまざまな県民主体の活動も一緒にやっていることとしたことは素晴らしいですね。私も末席に加えていただき、非常に

誇らしく思っています。

コロナ禍で再発見した文化の力と可能性

知事 文化の学術的な定義は「Way of Life」です。日本語にすれば、堅苦しくは「生活様式」ですが、平たく言えば、地域の生き方や暮らし方のことです。お茶のある普段の生活はそのまま静岡の文



静岡県知事 川勝 平太

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在4期目。



宮城聡演出 SPAC公演『アンティゴネ』



UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川

演や展示を提供し、鑑賞してもらうことによって、県民の文化度を高めていくという活動が主体でした。それと連動しながらも、むしろ県民自身が主人公になる主体的な創造活動をどのように応援していくかということが、これからの課題になります。そこで、福祉や教育、場合によっては観光、まちづくり、そうした多様な活動を応援していくために、「アーツカウンシルしずおか」が設置されました。最終的なゴールは全ての県民が表現者になること、あるいは、少なくとも創造的になる、ということだと考えています。

例えば『無人駅の芸術祭』では、まちづくり団体の方たちが中心になっています。『富士の山ビエンナーレ』は企業を含めた地元有志が中心になって運営しています。『かけがわ茶エン

ルズに行く、そこにあるのは生活だけですが、暮らしのスタイルに憧れて多くの人が訪れます。迎える側でも自分たちの生活様式と地域に誇りを持っています。静岡には「静岡・ウェイ・オブ・ライフ」があり、それが国内外の人々をひきつけるようになることが課題です。文化プログラムは地域文化の掘り起こしを狙ったものでもありません。

鈴木氏 2020年の春から、ほとんどのプログラムが中止・延期・縮小され、文化の火が消えるというのは、こつこつと身にならなきてきてしまっていました。現場の人たちは生活も大変でしたが、気持ちだけは持ち続けましたよ、ということ、皆さんと励まし合いながら続けてきました。それでも結果的にできたことは、新しい演出方法ができたこと、新しい演出方法ができたこと、掛川市長が実行委員長となり、行政がイニシアチブをとっています。このように主体がさまざまあること



報告書全文はこちら

「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」といえばアメリカ人の生活様式で、それに憧れて人々がアメリカへ行きたがる。あるいはイギリスのソツウオ

ナレ』はもちろん市民と一緒ですが、掛川市長が実行委員長となり、行政がイニシアチブをとっています。このように主体がさまざまあること

進委員会を立ち上げたときの発会式で、知事が、「オリンピックが終着点ではない。その後、オリンピックが終了した」とはつきりおっしゃったので、私達もそのつもりで文化の土壌を掘り起こし、耕し、ここまでするまで5年間やってきました。この後、そこに芽が出て花が咲くというところまで、県民の皆さんが一緒になって作り上げていくということが大事だと思います。そのためネットワーク作りや人材育成を「アーツカウンシルしずおか」に期待しています。

結局、コロナ禍で我々が再確認したのは、芸術文化というのは、必ずしもイベントではないということです。例えばお祭りでは神輿や山車、あるいは踊りといったところが注目されますが、実は一日だけのイベントのように見えて、一年中催事があります。そうした意味で、芸術文化の活動というのは年中やっていくもの、知事の言葉を拝借すると、まさに生活様式そのものです。その観点から言えば、コロナ禍でもいろいろな工夫の余地があり、むしろ逆に考えさせられる機会にもなったような気がします。



静岡県文化プログラム推進委員会・委員長 鈴木 壽美子氏

1946年生まれ。東京女子大学文理学部英米文学科卒業。鈴与(株)監査役、静岡県文化協会会長、静岡県文化財団理事長、静岡県舞台芸術センター理事長。静岡県教育委員会委員長、静岡地区調停協会会長を歴任し、2012年藍綬褒章受章。大阪府出身。



アーツカウンシルしずおか・アーツカウンシル長 加藤 種男氏

1948年兵庫県生まれ。全国各地の地域創造、創造都市を結びつける多数のアートプロジェクトや制度を立案し、そのネットワーク形成に取り組む。京都造形芸術大学客員教授、東京都歴史文化財団エグゼクティブアドバイザーなどを歴任。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。